

昔話と歌謡

白田 甚五郎

一

日本口承文藝學會の研究誌『口承文藝研究』には、第五號から共通テーマとして「昔話と歌謡」の論文が載つてゐます。昭和五十七年の第五號には、眞鍋昌弘氏の「昔話の中の歌謡」、福田晃氏の「昔話と歌謡の間―南島の伝承をめぐって―」、昭和五十八年の第六號では、田中瑩一氏が「昔話の中のうた―『舌切雀』の場合―」、加藤千代氏が「チベットの歌劇と昔話―『文成公主』をめぐって―」を發表してをります。以上の四氏の他には、友久武文氏が「昔話と歌謡―(日本口承文芸協会編『昔話研究入門』所収)、また、田中瑩一氏は前掲論文に先行して、昔話研究懇話会で「昔話に見られる『うた』の諸相―文学性と音楽性―」を口頭發表してをります。それぞれが「昔話と歌謡」の問題について、異なつた立場から昔話と歌謡の現象を追求し、いろいろの成果をあげてをります。

したがつてここでは、昔話と歌謡の関係をまう少し大局的見地から、縦の時間的流れについて、それ／＼のステージを考へながら、この問題の本質をば浮かびあがらせるやうにしていきたいと考へて

をります。既に私は、『口承文藝研究』第五號に「口承文藝における歌謡と説話」といふ論考を發表し、一つの見通しを述べましたが、今回はその延長といふことで私見を述べるつもりでございます。

二

昔話と歌謡を考へるときに、すぐ浮かんでくるのは「天人女房」といふ昔話です。先年亡くなられた奄美大島の田畑英勝氏は、昭和二十九年に『奄美大島昔話集』を上梓しました。この昔話集を見て一番心を惹かれたのは「天人女房」の資料です。前半部分を引用しますと、

天人天降(アモ)れて里降(ウ)りて「天人が天降つて里に来て」
東知念川(チネンゴ)浴みりゆたつとう「川で浴みていたら」
みかる主前に見会われて「みかる主に見つけられて」
飛び着 舞い着やくくされて「飛び着、舞い着はかくされて」

のやうに、前半が口説、歌謡スタイルで、後半が語り、散文スタイルとなっていることに不思議な形式を備へてゐます。そして、全体を口説といつてゐるわけです。

田畑氏は、『南島の昔話』（『昔話 研究と資料』七号）に、「奄美口承文芸の原点」の論文を載せてをります。そこでは、徳之島の「全島口説」の前口上を紹介し、「口説ぬずむか 誦でいうえしら（口説をのぞむか 誦んであげましょう）」と、誦の字に「ゆ」と振り仮名をつけてゐます。さらに、昭和四十七年九月に私が『國文學』に書いた文章を引用し、次のやうに述べてゐます。

「誦でい」に対して白田甚五郎教授は「△誦む▽が語ることも歌うことも含んでいると見られる」と、目ざとく指摘され、「さらに、誦んでいるうちに、誦み手の感情の動きに従って、歌うようにもなり、語るようにもなるのであろう。古意を帯びる天人女房譚が徳之島の人々によって、時に口説として歌われたり、時に語り物として語られたりすることは元來說話伝承の古い形を残しやすかったのだと推測する」と述べておられるが、まさしく、方言の「誦む」には前述の通り「歌う」と「語る」の二通りの意味があるのである。

この後の御論は私の説を証據だてるやうなことを書いて下さっています。なぜ、私が、『奄美大島昔話集』の「天人女房」を見たとき心惹きつけられたかが、これでお分りになるかと思ひます。

三

私はこのことから、八千矛神の「さ婚ひ」の歌を思ふからでございませう。『古事記』だけに載つてゐる傳承ですが、はるばると出雲から糸魚川のあたりの高志の沼河比賣を求愛しにいらつしやつた八千

矛神、つまり、大國主神の「さ婚ひ」の歌の結びに、

いしたふや 天馳使あまはらひ

事の 語りごとも こをば

とあります。この歌謡と、沼河比賣のお返しする歌謡を併せて「神語り」といひます。正確に讀むならば「カミガタリゴト」と讀むべきであると思ひますが、略して讀むなら「カミガタリ」でも「カミゴト」でもよいでせう。「事の 語りごと」の「コト」といふのは、「アエノコト」「コト八日」のやうに、祭とか饗禮といふ意味になるわけですから、結局、「神聖」といふことになります。それで、「事の 語りごと」といふのも「カミガタリゴト」と同じやうな意味にならうかと思ひます。

問題は、このやうな歌謡がどうして「語りごと」といはれるかといふことです。土橋寛氏は、これは「神語り歌」の歌が略されてゐるのではないか、あるいは、歌が脱落したのではないかと述べてゐます。しかし、私はむしろ、「事の 語りごと」も「こをば」と歌謡の中でいつてゐるのですから、正確には、神語を「カミガタリゴト」と讀んだ方がよいといふ考へ方を持つてをります。

四

奄美大島に「天人女房口説」があります。口説といふ名で昔話が語られてゐるわけです。口説といふ言葉自體も美は分りにくい言葉で、さう古くは見出されない言葉なのです。平安朝の物語には、副詞に「くどく」とあるので、それが「口説」といふ言葉を生み

出してゐるとも考へられるのですけれども、実際には、まだ見出し得てをりません。

ところで、「天人女房口説」ではないのですが、今でも盆踊りの口説としていろいろなものが歌はれてゐるのであります。さういふ中で、はつきりと昔話が口説として行はれてゐるものが「山田白瀧」でございます。このことは、雑誌「國文學」に連載しましたが(『天人女房その他』桜楓社。に収録、そこでも書きましたやうに、かつて「山田白瀧」は流行唄として、版本として出版されてをりました。偶然入手した唄本の中に「山田のつゆ」といふのがありました。これは、岡山縣白石島の盆踊りとして行はれてゐる「山田のつゆ」と、一字一句違はないものです。この唄本の版元は大坂の安治川橋詰豊後屋伊兵衛、「新ばん山田のつゆ」といふのが外題、表記されているのは、流行音頭「兵庫口説」で、主人公の山田が身分の低いものだといふことになつてゐます。ところが口説では、一方の白瀧の父にあたるのは、「よこはぎのとよなり公よ」とあるのですから、古い奈良朝時代にさかのぼつて設定されてゐるわけです。

「山田白瀧」の昔話は、兵庫縣のあたりでは、傳説として行はれてゐるものですから、昔話が傳説化したのであらうと思はれます。兵庫だけではなく、群馬縣にも「山田白瀧」の伝説があります。こちらは、よこはぎのとよなりといふやうなところまでは結びつけてをりませんので、よこはぎのとよなりといふのは、作者の創意だと思ひます。

とにかく、近世のおそらく元禄前後のころに、兵庫口説といふものが流行つたのだと思ひます。大坂や姫路、廣島といふ、瀬戸内海

沿岸の大きな町、港に版元がありまして、かういふ唄本を出してゐたのです。海上交通とともに流行音頭も唄も運ばれ、さらに上陸してからも、だんだん山の中にまで入つていつたのです。その例として注目すべきものに、「牡丹長者」といふ口説があります。

これは、「山田白瀧」の何倍にもなる長篇の口説でして、私はまぼろしの叙事詩と呼んでをります。「牡丹長者」は、九州の東側から西側にかけてだんだん見つかつてきましたので、「山田白瀧」と同じやうに船でもつて運ばれてゐたときか他に考へやうがないものです。九州地方だけでなく中國地方にもどこか出てこなくてはならないと探してをりました。さうしたら、倉田隆延君が鳥根縣の山中で見つけ出してくれました。おそらく、山口縣の江崎といつた港から道が山中を縫つて、そして廣島へ出てゆく街道、參觀交代のときは、山口の大名はその街道を通つて廣島の五日市あたりを抜け、そこから廣島に出て、船で瀬戸内海をいつた、その動きに沿ふのではないかと想像してをります。

そのうちに、廣島女子大學の友久武文氏が廣島の山中で「牡丹長者」を見つけてくれました。かうして「牡丹長者」も「山田白瀧」と同じやうな動きをば、瀬戸内海と日本海でみせてゐるわけです。「山田白瀧」は日本海側ではまだ見つかつてをりません。ただし、今述べたやうなことを考へれば、「山田白瀧」が日本海側で見つかり、逆に「牡丹長者」が瀬戸内海でも見つかれる可能性があらうかと思ひます。

「牡丹長者」は昔話としては出てきません。しかし、そのストーリーは、説話に還元できるものがございます。発端は、うつぼ舟に

のせられて流された女性がヒロインになつてゐるのですから、説話としても傳承的モチーフを指摘できるものであります。結婚のときの衣裳くらべも、口説ですから非常にはなやかに表現されてをります。

さらに、徳江元正君が「山田白瀧」が風流太鼓踊りに入つてゐることを見つけてくれました。福井縣の山の中、あるいは京都の北の方の盆踊りなのですが、風流踊りは太鼓にあはせて踊る方が長いので唄は長くありません。それだけに組唄式になつてをり、これは、中世の風流踊りの流れでございます。中世の末、大和で雨乞ひのために風流踊りが盛んに行はれたことは、中世の記録に出てゐますが、その系統のものです。ですから中世ぐらゐまで「山田白瀧」はさかのぼれるわけでございます。

五

かうして口説といふものは、本土の方では元禄前後期くらゐにたいへん流行りましたが、先ほど述べたやうに、言葉としてはもつと古いところまでいきさうな感じでございますので、昔話「天人女房」のやうに歌謡化する可能性はかなり残せることができます。しかし、それが先ほどの、神話や天語歌といふやうなところまで、なかなか結びつかないわけでございます。けれども、ただ、かういふ言語表現活動を示すところの、クラシックな言葉は、ある意味で、昔話と歌謡の関係の中での本質的なものを示してくれるのではないかと、いふ期待をもつわけでございます。

このことについては、前の日本口承文藝學會第五回大會のときに、多少ふれてはみたのですけれども、「歌もちて語りて白さく」といふことが『古事記』仁徳天皇の條に出てきます。これは、仁徳天皇が歌でお尋ねになつたとき、建内宿禰が歌でお答へになるところです。

ある時、天皇豊の樂したまはむとして、日女島に幸でましし時に、その島に雁卵生みたり。ここに建内宿禰の命を召して、歌もちて、雁の卵生める状を問はしたまひき。その御歌、

たまきはる 内の朝臣

汝こそは 世の長人

そらみつ 日本國に

雁子産と 聞くや。

ここに建内宿禰、歌もちて語りて白さく、

高光る 日の御子、

諾しこそ 問ひたまへ。

まこそに 問ひたまへ。

吾こそは 世の長人、

そらみつ

雁子産と 日本國に

いまだ聞かず。

かく白して、御琴を賜はりて、歌ひて曰ひしく、

汝が玉や 終に知らむと、

雁は子産らし。

最後は五七七の片歌ですが、このやうに、歌でもつて語るといふことがあるならば、先ほど述べたやうに、「語り」と「歌」が結んで「神語りごと」といふことがあつてもよろし、「事の語りごと」といふ

ふことを含んで、「歌」が「事の語りごと」だといはれることがあるのも自然でございます。

かういふ言語表現の状況が古代にはあつたといふことを考へると、昔話と歌謡の關はりが、一層明らかになつて参ります。昔話世界の一つの特色をなしてゐる結句の形にしても、先ほど論じました神語りごとの中の「いしたふや 天馳使 事の 語りごとも ことをば」に見出せます。「いしたふや」については、私は磯傳ふと解釋してをります。古典の中に磯傳ふがあるので、それがつまつて「いしたふ」となつたと考へてよいと思ひます。長い長い歌が最後に、「事の 語りごとも ことをば」と述べ、魚のゐる磯場を傳つて移動していく海部の馳使が傳承してをる大事な大事な神聖な語りごとは、全部これでお話ししましたよ、さういふ氣持があらはれてゐるわけです。

この氣持は、現在の昔話世界でも、結句中にあらはれてをります。簡単な例をいへば、「これきり」「それきり」「さみさつきり」（これは「さるかぎり」の変化した形でせう）「どんとはらひ」などがあります。これらは、大事なことはすべてお話ししましたといふ内容でございます。

かうしてさかのぼつて参りますと、精神傳承の上から、「語り」と「歌」といふのは、非常に密接な關係をもつてゐるのが分ります。いふまでもなく、それらは、語りの力であり、歌ふ力といふものををば、聞き手にうつたへるところのものであり、傳へるところのものであります。「語る」と「歌ふ」といふものを分析すると、いづれも、言葉の力で相手の魂に衝撃を興へるといふ大事な言葉の力を示すも

のが、「カタル」であり、「ウタフ」であります。さらに、それを復合したのが「ヨム」であると前の大會で述べましたが、その兩方の言語表現の機能を考へると、どうしても、昔話の中に歌謡が入つてゐないと生きてこないといふ時期があつたのではないだらうかと思はれるのです。

六

先ほどの仁徳天皇の條で「歌もちて、雁の卵生める狀を問はしたまひき」といふ、世間話をもち出してゐるやうなところがありました。日本ではあまり雁が子を産む狀況は見かけられないのですが、とにかく、大變縁起のよいことだとしてゐるわけです。

私が韓國の民俗村で婚禮の行列を眞似てやつてゐるのを見たときに、行列の前の方に「木雁」といふのがありました。これは木で作つた雁でして、行列の先頭であつちへいつたりこつちへいつたり、日本のひよつとこみみたいに滑稽な動作をするのです。本来は、この雁が縁起のよい鳥であつたのでせう。かういふところからも、仁徳天皇と建内宿禰のやりとりの中で、雁のところを非常に強く、壽歌としてでてきたりしてゐる背景がなにか察せられるやうな氣がいたします。

さらにいふと、歌でもつて尋ねるといふことは、『古事記』に出てきます。倭建命が「新治 筑波を過ぎて、幾夜か宿つる」と尋ねたところ、だれも答へる者がゐない。ところが、御火燒の老人が「かがなべて、夜には九夜、日には十日を」と答へた。倭建命はそれを

大變ほめて、老人を東の國造にした。若干の違ひはありますが『日本書紀』にも出てゐます。このやうに簡単なことを答へて國造になるといふことは考へられないことですが、話としては、仁徳記の場合と同じやうに、歌で答へる、歌の力といふものを儀禮的に示すことになつてゐるのであらうと思ひます。

倭建命の歌は、「筑波の道」と称して連歌の道を意味する基となる非常に重要なものです。この歌についてはいろいろ解釋されてありますが、私にも一説あります。簡単に申し上げますと、重點を「筑波」と「幾夜か宿つる」において考へなければならぬといふことです。筑波は歌垣の名所であつたわけですから、その方から考へてゆく。つまり、倭建命の物語の筋で考へるとともに、まう一つは、獨立して考へるといふことが、このやうな古代歌謡には必要なわけです。

獨立して考へれば、おそらく、新治筑波を過ぎて、歌垣に参加して寢て、それからどのくらゐといふふうなことであつたのであらうかと思ひます。つまり、歌垣の歌であつたのでせう。それが、倭建命の東征の物語の中に入つた。それでこのやうに、歌をもつて尋ね、歌をもつて答へるといふ、いふならば、「言問ひ」といふ形を示してゐる。私は「日本文學言問ひ起源説」といふのを持論としてゐるわけですが、その「言問ひ」の一つの姿がここにあります。

七

このやうなものを含んで、實は、日本の昔話は、はるか遠いところから、今日みるやうなものに展開してきてゐるのです。「山田白瀧」の中の、山田男と白瀧姫の歌問答もその一つです。白瀧姫の出した歌に對して、山田男がそれをこえる歌をちやんと詠み返すと、それにより美しく若い女性が得られる。これは結局、歌のもつ言葉の力であり、それを含んで、語りといふものは、いふならば、言葉の力を得てゐるのです。

つまり、「神語りごと」「事の語りごと」といふものをつつみ込みながら、歌が語りとともに歩んできた、あるいはその逆に、語りの中に歌がつつみ込まれて育つてきたのかもしれない。両方が混融しながら、長い傳統を我々の言語傳承の中に、盛つてくれているのでありませう。

※本稿は昭和五十九年十二月八日に行はれた民族文化講演會（國學院大學）の講演にもとづいてゐる。

（うすだ じんごらう・國學院大學）